

ヨハネの福音書のエスカトロジー

小 田 丙 午 郎

一

ナザレのイエスが十字架の上に死んだのは大体紀元三十年であった。彼の死後彼が死人からの復活 (*anasthaseōs nekrotōn*) によって神の子と信じられた。この信仰の上に建てられたのは教会 (*ekklesia*) である。この教会がその形態を整えかけたのは四九年か五〇年に開かれたエルサレム会議前後であった。この原始キリスト教会の信仰の中心となつたのはイエス・キリストの再来に対する切なる待望 (*parousia*) であつた。彼らの兄弟愛のよつて来たのはこのパルシアであつた。パウロはこの消息に就いて次のように語っている。

は、あなたがたはすでに、あなたがたのところまで伝えられた福音の真理の言葉によつて聞いています。(コロサイ人への手紙一、三一五)

そうしてこのパルシアがその絶頂に達したのは紀元五十年の頃でパウロがテサロニケの信徒に宛てて手紙を書いた時ではなからうか。^{註一} 当時教会の柱と重んじられていたヤコブやペテロやヨハネ、また自らイエスの弟子に応わしくないと謙抑したパウロなどの使徒は勿論、一般信徒はイエス・キリストの再来を近い将来 (*Epiphany*) の出来事として信じていた。これは彼らには歴史の中の、そうして歴史を通しての出来事であつた。これは此岸の出来事であつて、彼岸の異象ではなかつた。彼らは花婿を待つ花嫁のように歓喜の中にキリストの再来に備えた。また彼らは盗人が夜陰に襲来するような事態として戦慄と恐怖とを以つてこれに処した。このような歓喜とそうして緊張にもかかわらず、キリストの再来は遂に実現しなかつた。^{註二}

一方六四年ローマ皇帝ネロがキリスト教徒を迫害した。七〇年テトスによつてエルサレムが滅ぼされた。九六年にはドミティアン皇帝が小ア

シアの教会を弾圧した。このような事情の下に信徒のルーシアはひたむきにその情熱を失った。序に新約聖書のフィナーレをなしているヨハネの黙示録が書かれたのは九六年、これが原始キリスト教会の最後の^{註四} *μαρτυρία* Θαίμαραナ・タを告白し、また祈願したものである。

λέγει ὁ μαρτυρῶν ταῦτα ἔρχονται ταῦτα.

これらのことをあかしするかの身せになる、「しかり、わたしは来べきに来る」。

Ἄμην ἔρχου κύριε Ἰησοῦ.

アメン、主イエスは、きたりませ。ヨハネの黙示録22:20

なお旧新約聖書においてルーシアを預言しましたこれに言及する箇所は四百十八を越えると云われている。

二

使徒たちはルーシアの信仰維持のため、その解釈と教義について専念した。

「人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、ちようど妊婦に産みの苦しみが臨むように、突如として滅びが彼らをおそって来る。そして、それからのがれることは決してできない。テサロニケ人への第一の手紙五、三

この手紙の発信者すなわちパウロによれば再来は突発的な出来事である。そうしてこのように再来を突発的な出来事として宣言する新約聖書の箇処にマタイによる福音書(二四、二七)。ルカルによる福音書(一七、二六一二七)ペテロの第二の手紙(二、五、三、六)などがあげられる。

再来の突発預言は信徒の目を醒まし、その日の備えに自制に自制を加えさせた。しかし、他面これは終の日ののさばきに対し過度の恐怖を抱

く余り自らの救いに専念し、神のこと、人のことを思う余裕を失わはせただのではなからうか。

愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く。恐れには懲らしめが伴い、かつ恐れる者には愛が完うされていないからである。(ヨハネの第一の手紙四、一八)

再来の突発性を宣言したのに対し、その漸進性を語ったのにイエスの次の言葉があげられよう。

また言われた、「神の国は、ある人が地に種をまくようなものである。夜昼寝起きしている間に、種は芽を出して育って行くが、どうなるのか、その人は知らない。地はおのずから実を結ばせるもので、初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる。(マルコによる福音書、四、二六一二八)

このような再来の漸進性の宣言は、しかし、信徒に対し

「聖なる、まことなる主よ。いつまであなたはさばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか。」ヨハネの黙示録六、一〇
と云う疑惑を投げさせなかったか。

他方再来の永遠性が高調された。

愛する者たちよ。この一事を忘れてはならない。主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである。ペテロの第二の手紙三、八

これは、しかし、再来を此岸の出来事たらしめないで反って彼岸のそれとしたのではなかったらうか。^{註五}ブルトマンの言う初代キリスト教会のエ

スカトロロジーが世俗化される危険もまたこのような永遠化の中に胚胎したと推定^{終末論}されないであろうか。

パウロはローマ人への手紙の九章から十一章にわたって彼の救済史観を展開しその結尾を左のように封じている。

^{註六}
Ὁ Βίβλος πλοῦτου καὶ σοφίας καὶ γνώσεως τοῦ θεοῦ εἰς ἀνεξέσπυρον
おお 神の富と知識とそうして知識の深さよ。何とそのさばきは驚めがたく、
τὰ κοίματα αὐτῶν καὶ ἀνεξέκλιταί αὐτῶν αὐτῶν.
その蓋は測りがたいことよ。ローマ人への手紙 11:33私訳

このように神の富と知恵と知識とを称え、そうして一切を神の摂理に帰している。

パウロのこの態度は一般の使徒に共通している。彼らは、再来を突発的な、また漸進的な、そうして永遠的な出来事として解釈しまた説明しながらも、信徒の疑惑、焦慮、絶望に対して応えるものは信仰と忍耐とそうして希望であった。

神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは忍耐である。

もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。

わが義人は、信仰によって生きる。

もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない。へブル人への手紙(一〇、三七―三九)

更にこの手紙の発信人は信仰に就いて
さて、信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を

確認することである。(同、一一、一)と附言している。

使徒たちは、信徒を再来に対する疑惑、焦慮そうして絶望から守ろうとして心をつくし、精神をつくし、思いの限りを尽した。他面彼らは異教と異端との両面攻撃に対し身構しなければならなかった。

さまざま違った教によって迷わされてはならない。(へブル人への手紙一三、八)

異教とはその起源と本質において、キリストの福音と全く異質的なものである。

例えば偶像礼拝、淫行、宴楽などの如きもの。その細目はローマ人への手紙一章一八節から三〇節またテモテへの第一章三節から一節などにおいて示されている。

異教は教会の外から来た。しかし、教会の中にこそ恐るべき福音の敵があった。

^{註七}
それは文字通り羊の装いをした狼であった。

その説くところは人心を納得させ、また説くもの、行状には非難に値するものがなかった。

しかし、それは神のキリストによる罪の贖いを空無にするものであった。聖書の所謂偽使徒 (*Pseud-apostolos*) 偽預言者 (*Pseud-propheta*) また偽キリスト (*Pseud-Christos*) と呼ばれるのは、いずれも異端の指導者たちの異名である。

異教と異端の横行は正しく世の終末の兆である。新約聖書の二十七巻を通じて直接に間接にこの問題に取組まないものはない。

παθὴν σαρκὶν ὕδατος, καὶ καθὼς ἦκούσας ἐπὶ ἀντίκριτος, κ
 子供たちよ、今こそ終りなんだ、そうして私たちがキリストの敵が来るときい
ἐφ' ἑσραί, καὶ νῦν ἀντίκριτοὶ πολλοὶ γερουσιῶν. ὀβρυ γρηώκοιμεν
 て来たように、今正に多くのキリストの敵があらわれて来た。これによって私
εοκάρη ὕδατος ἐστί.

私たちは今こそ終りの時だと認知している。ヨハネの第一の手紙 2:18 使徒
 使徒たちが信徒をそのパルシアの脱落から救い、一方異教異端の両
 面攻勢に対して取った最後の守備は何であつたらうか。

彼らはこれがため、その主にして師なるナザレのイエスの生涯を回想
 した。その言行に秩序を与えた。その人格の深處を究めた。そうして旧
 約聖書によって彼の預言史上の地位づけを行つた。彼らはこのようにし
 てイエスを神の子と信じ且つそう告白した。

三

イエスの神性とその神格。ここに彼らがイエスの生前の言行において
 量としての新しさ ^{註九} *νεος* でなく質としての新しさ ^{註一〇} (*καινός*) を発見した。

イエスの言葉は彼らに新しい皮袋に盛られた新しいいぶとう酒であつ
 た。(マタイによる福音書九、一七)

またその言葉には何人にも見られない権威があつた。(マタイによる福
 音書七、二八)

イエスの言葉は不滅である。

天地は滅びるであろう。しかし、わたしの言葉は滅びることがない。

(マルコによる福音書一三、三一)

このようにして使徒たちの戦いの方向は定まった。マルコ、マタイ、

そうしてルカによるイエスの伝記すなわち共観福音書が著されたのは
 以上述べた教会の危機に應えたものであつた。ヨハネによる福音書もこ
 の例外ではない。

いな、ヨハネによる福音書こそこの初代キリスト教会の最も重大な課
 題に取組んだものである。

マルコ、マタイ、ルカによる共観福音書とヨハネによる福音書は厳密
 な意味におけるイエス伝ではない。それらが宣教的、建徳的意図を以つ
 て書かれた事は例えば

しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたイエスは神の子であ
 ると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を
 得るためである。(ヨハネによる福音書二〇、三一)
 によつて明らかである。

前世紀の中葉シュトラウスルによつて歴史的イエスの科学研究の端
 が開かれた。これが、しかし、文字通りの意味において、学問的研究史
 の嚆矢をなしたのはライマールス ^{註一二} においてであつた。彼はイエス伝の史
 料としてヨハネによる福音書の価値を否定した。これは必ずしも全面的
 に賛意を博したのではなかつた。が、大は共観福音書に歴史を、そうし
 て第四福音書に神学を許すのが常であつた。これは「神学的詩」と呼ば
 れ、また「福音書の形式をかりた教理上の著述」と評せられたのはこの
 間の消息を語っている。ヨハネによる福音書が共観福音書の記事と調和
 されないことは何人も容易に感得するであろう。ヨハネは、しかし、彼
 の福音書を左の文字を以つて結んでいる。

イエスのなさつたことは、このほかにまだ数多くある。もしいちいち

書きつけるならば、世界もその書かれた文書を取めきれないであろうと思う。(二一、二五)

この記事から私たちがヨハネは福音書をもつるに当り、種々の資料を用いたことを推定するのは不当であろうか。それが由つて来たのは彼の個人的経験だけであろうか。

イエス伝研究において、共観福音書が主要な役割を果たして来たことは事実である。が、他面これと並んで第四福音書の史的価値を評価されて来た事もまた争われない。

ハルナックは「ヨハネによる福音書はイエスの歴史の材料としての要求はもちえぬ。」と主張する反面「たとい識別しがたくはあるが、真実なる伝承を多少は含んでいる。」と述べていると云われる。そうして今日はヨハネの福音書を共観福音書とともにイエス伝の重要史料と見做す傾向に向いつつある。共観福音書はイエスの生涯の課程を記述した。第四福音書はイエスの生涯の出来事を解釈した。このように両者を区別することは異議を呈されないであろう。第四福音書の記者は、パウロとの交渉があつたであろうか。

この記者がパウロ書翰から影響されたと思われる箇処が少なくない。見よ、世の罪を取り除く神の小羊。(ヨハネによる福音書一、二九)これを思わせる同じ精神と類似の表現は

わたしたちの過越の小羊であるキリストは、すでにほふられた。(ヨリント人への手紙五、七)

パウロは人も知るように、神の義と律法の義とを峻別した。

わたしたちは、こう思う。人が義とされるのは、律法の行為によるの

ではなく、信仰によるのである。(ローマ人への手紙三、二八)ヨハネの福音書の記者はこれに呼応したかのように

律法はモーセを通して与えられ、めぐみとまこととは、イエス・キリストをおおしてきたのである。(ヨハネによる福音書一、一七)

その他霊と肉に関し、主人と奴隸とに関し両者の間に、その表現と精神とにおいて一脈の連関が見出される。

ヘブル人への手紙の発信者は曾つてパウロと信じられた程パウロの信仰に影響されている。彼はユダヤ教の祭儀について

何となれば、法律はきたるべき良いことの影にすぎず、そのもののかたちをそなえているものではないから、年ごとに引きつつきさざげられる同じようないけにえによつても、みまえに近づいて来る者たちを、全うすることはできないのである。(同、一〇、一)

この記者によればユダヤ教の祭儀は真の救いの象徴以外の何物でもない。この立場はヨハネにおいて更に深化している。

神のパンは天から下つてきて、この世に命を与えるものである。(六、三三)

と言ひ、更にこれに引続き「わたしが生命のパンである。」(六、三五)とイエスに語らしめている。

これはヨハネの福音書が書かれた時、主の晩餐が重大な儀式として信徒の生活に義務づけられていたことに外ならない。

ヨハネの福音書の記者は一体誰であろうか。

これに就いて四世紀まで、セベタイの子ヨハネがその著者として教会に信じられていた。

しかし、一七九二年イギリスの^{註一四}エヴァンスがヨハネの福音書の記者について、従来の所伝を否定した。その理由は一応肯定に値するものがあつた。そうして一九世紀の終から当世紀の始めにかけてヨハネ福音書の著者についての論争が展開された。しかし、これらの論争のよつて来るところは一つの仮定に基くことが既に論争の初期^{註一五}ウリアム・サンディによつて明らかにされた。ヨハネの福音書の著者をヨハネたらしめない最大の理由は、その書におけるギリシア思想の影響が主張されたことであつた。殊にそれがヘレニズムの神秘主義の用語を多く用いている点がある。殊にそれがヘレニズムの神秘主義の用語を多く用いている点がある。殊にそれがヘレニズムの神秘主義の用語を多く用いている点がある。殊にそれがヘレニズムの神秘主義の用語を多く用いている点がある。

ἐν τῷ εὐαγγελίῳ ὁδοῦ καὶ ἀληθεία καὶ ἡ ζωὴ.

私こそ道であり、真理でありそして生命である。私 14: 6

右に掲げた章句の「真理」と「生命」はヘレニズムの神秘主義の最高の命辭であつた。そうしてこれを獲得すべく、人は認識の課程を通らなければならなかつた。パウロに取つて救いの条件は *ἐπιστήμη* 信仰がヨハネにおいて *γνώσις* 知識に代つた。

永命の生命とは、唯一の、まことの神でいますあなたがつかわされたイエス・キリストを知ることあります。(一七、三)

知るの原語は *γινώσκω* である。

一九四七年「死海の書」がクムラン地方において発見された。この発見の結果が聖書学界に与える影響は刮目されている。

この文書の忠実な解明者アレグロはヨハネの福音書に關し次のような示唆を与えている。

クムラン文書がヨハネ文書の研究に甚大な影響を与え、これまで長く

信じられていた多くの考えが根本的に訂正なれなければならなくなつた、ことは事実である。ヨハネは福音書の記者のうちで最もギリシアの影響があつた人と見ることはできない。彼の「知識派」^{グレイセス} およびその思想の全構成は、今日パレスティナの土地に根を下したユダヤ教の一派から直接発生したものと見られ、また彼の用いた資料は福音書伝説の初期の布石者の中で創始されたものと認められる。(死海の書アレグロ 北沢義弘訳一四六頁)

ヨハネの福音書が書かれたのは九六年と推定されるのは必ずしも誤りではなからう。

ヨハネは殉教を免れた。彼はエペソに定住しそこで天寿を究うした。彼の在世中はローマの皇帝トラヤン (Trajan 98-117) の在位中であつたと伝えられる。

彼はナザレのイエスの愛弟子であつた。彼の生涯の出来事の日撃者であつた。そうして彼は使徒時代の教会推移の洞察者であつた。

四

再びパルシアに戻ろう。パルシアに就いて使徒も一般信徒も、これを彼岸の出来事にせず、此岸しかも即時の事件としていたことは、よく聞いておくがよい、人の子が御国の力をもつて来るのを見るまで

は、死を味わわない者がここに立っている。」(マタイによる福音書一六、二八)

によつて窺われる。同じようにパウロは

わたしたちは主の言葉によつて言うが、生きながらえて主の來臨まで

残るわたしたちが、眠った人々より先になることは決してないであろう。(テサロニケ人への第一の手紙四、一五)

と初期のルーシアの精神を受け継いでいる。以上のようなルーシアの緊迫感においては救いの条件の複雑と単純さの問題に關し、ペテロとその伝道分野を異にしたパウロとエルサレム教会の所謂イエスの直弟子との間には差別がなかった。しかし、ヨハネがルーシアに就いて語るところがその福音書の中に見出されない。少なくともパウロが語るような

すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で天から下ってこられる。(テサロニケ人への第一の手紙四、一六)

のような黙示文学的終局については何ら触れていない。

共観福音書において主題となったのは神の国 (*Basileia tou Theou*) であつた。しかし、ヨハネはこの神の国と云う語を永遠の生命 (*zōē aionionou*) に代えている。

エスカトロロジーは、ではヨハネにおいて全く止揚され廃棄されたであろうか。

ヨハネによる福音書の記述の中に、人が見逃されない一つの様式に逢遇する。その表現の様式は事前預言と事後附言との並列である。

イエスとサマリアの女との間に對話が交わされた。イエスはこの對話の中でサマリアの女に、「しかし、まことの礼拝をするものたちが、霊とまことをもって父を礼拝する時が来る。

そうだ、今きている。」四、二三

原文は同一文の中に右に掲げた二つのものを包含させている。

しかし、まことの礼拝をするものたちが、霊とまことをもって父を礼拝する時が来るだろう、そうして今はそれなのだ。

「霊とまことをもって父を礼拝する時が来るだろう。」これは正に事前の預言である。

「そうして、今はそれなのだ」これは事後の附言である。

既に触れたように七〇年にエルサレムが滅亡した。エルサレムの神殿もこれとともに潰滅した。このことから祭司による儀式的礼拝が中断した。

「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すだろう。」(二、一九)

しかし、エルサレムの神殿の破壊は信徒たちの信仰のあり方を転換した。

彼らは神殿においてでなく随処に祭司によらず^{註一六}二三人キリストの名において自由な礼拝を持つようになった。

イエスの在世中にヨハネにとって事前の預言であつたものは、彼がこの福音書を書いた時代には既に成就していたのであつた。

因に「神殿破壊の預言に終のヨハネは次のように附加している。

それで、イエスが死人の中からよみがえったとき、弟子たちはイエスがこう言われたことを思い出して、聖書とイエスのこの言葉を信じた。(二、二三)

このように事前預言と事後附言とか並列が更にイエスが十字架につく寸前の時の言葉に表われている。

見よ、あなたがたは散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとりだけ残す時が来るであろう、いや、すでにきている。(二六、三二)

これもまたヨハネがイエスの在世中最後の悲劇的出来事を預言され、そうしてそれが即時成就した経験にもとづいて記述されたものと言って差支がない。

人が聖書の中にこのような事前預言と事後附言との綜合を発見しようとするならば、それは創世紀の第一章においてではなからうか。

神は「光あれ」と言われた。すると光があつた。神はその光を見て、良しとされた。(一、三一—四)

ここでは神の宣言が同時にその成就として歌われている。

初代教会の信徒はパルシーアを将来の出来事として待望した。彼らには、重ねて、パルシーアは将来の出来事であつた。

ヨハネには、しかし、前に明らかにされたように、事前預言と事後附言とが同時に綜合されているところから、パルシーアは将来的性格を持つよりもむしろ現在の規定を有するものではなからうか。ブルンナー博士の言う将来的なものが現在するとは厳密な意味でヨハネの場合ではなからうか。

一方彼がイエスの十字架上の死を遂げようとする瞬間について次の描写をしている。

これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世でなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。(一六、三三—)

この文の勝っているの原語は *deinryka* は *vikaw* の現在完了形である。

ここにもまた事前預言と事後附言とが綜合されている。

五

初代キリスト教徒はキリストの降誕からその再来までの期間言い替えれば中間時 (*Zwischenzeit*) を恵みの時とした。ヨハネには、しかし、中間時があつたのであろうか。

マラタナ主来る。この語の持つ意義はまことに多岐である。キリストの万物支配。死人の復活。死者との再会。そうして新天新地の出現など。しかし、信徒に忘れられた一つの事がなかつたらうか。

「時期や場合は、父がご自分の権威によつて定められているので、あなたがたの知る限りではない。」(使徒行伝一、七)

上掲の章句に示されているように、時は神の権威の中にある。神の子としてのイエスもこれには与れなかつた。

事前預言と事後附言。宣教と実践。預言と成就。これらの同時並列はいかにして可能であらうか。ヨハネはこの可能を無条件に承認しない。

トマスがイエスに「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちには解りません。どうしてその道がわかるでしょう」との問いに対し「わたしは道であり、真理であり命である。」前掲の間に答え、若干の会話の後「わたしを見たものは父を見たのである。」と宣言した。(二四、四—一〇)

トマスは父を求めた。彼はイエスに求めたのはその預言であつた。し

かし、イエスがこれに示したものは預言ではなく、その成就であった。事はラザロの場合においてもまた同じであった。ラザロは死んだ。その妹姉マルタはイエスに悲しみを訴えた。イエスは彼女に死人のよみがえりの有無を訊した。マルタは答えた。

「終りの日のよみがえりの時よみがえることは存じております。」

これにもまたマルタのイエスの預言に対する希望が表明されている。これはイエスが答えたのは預言としての約束でなく、反ってその成就であった。

わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとひ死んでも生きる」(一一、二五)

ここにおいて私たちはヨハネのエスカトロジューはキリストの神性の問題に触れることなしには考えられない事を発見するであろう。

私たちは反覆の煩わしさを顧みないで、もう一度イエスとトマスの会話に帰ろう。

イエスを見たものは既に父を見たのである。トマスはこの事を理得したであろうか。

イエスはこのことをトマスに納得させるために命令するのはイエスの言葉の味解である。

イエスの言葉の味解、それはその実践である。これだけが神の意志を知り、また逆に神の意志を实践する者がイエスに来る。

わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものかそれともわたし自身から出た

ものか、わかるであろう。(七、一六一―一七)

イエスの時代人が彼をヨセフの子以外の何物とも評価しなかった。この時イエスが人をして神の子と信じしめるためには専らその言葉に耳を傾けその業に眼を向させなければならなかった。

わたしが父にあり、父がわたしにおられることをあなたは信じないのか。わたしがあなたがたに話している言葉は自分から話しているのではない。父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである。(一四、一〇)

そうして事はイエスの在世中にもまして彼の死後、パルーツァがそのパトスを失ったヨハネの時代においてなおさらであった。

ヨハネの福音書の中に「言葉」の語が四九回にわたって語られている。では言葉詳しく言へば神の言葉とは何であろうか。それは談片ではない。語録ではない。また教訓でもない。それはこれらの由って来る発言者の最終の自己表現であり、また自己伝達である。それにおいて発言者は自己の本質 (Essentia) と存在 (Existentia) が究極的に伝達されなければならぬ。そこにおいて語るものと聞くものとの関係は汝 (Du) と私 (Ich) とそれであって彼とそれとのそれではない。ここにおいて語るものと聞くものの緊張はその絶頂に達する。

そうしてここで聞くものが語るものに対し応答が迫られる。諾か。否か。あれかこれか (Entweder-oder) の決断に彼は立たしめられる。

この語るものと聞くものとの会合は文字通り一回限りである。

よくよくあなたがたに言っておく死んだ人たちが神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるだろう。(五、二五)

イエス・キリストの十字架の死は一回限りの出来事である。出来事は、しかし、普遍化され勝ちである。事は理を道入する。反対にまた理は事の裏付けを要請する。

人がイエス・キリストの贖いによって義とされる時、彼がそのアクセントをイエス・キリストよりも贖いにおく傾向を持たないであろうか。

主^{註一八}の晚餐が定則化されるのは人間のこのような傾向性の表われではなからうか。

ヨハネはこうした教会の傾向に挑戦した。

ヨハネのアクセントがあくまでわざの主におかれた。彼によればイエス・キリストその人への信仰こそ救いである。

キリストの救いはキリストその人、これがヨハネの立場である。

キリストの救いは上に述べたように定式化され易い。これはまた普遍化される。

ここに人は救いにその理論づけを試みる。この理論化がパウロの時に於いてコリントの信徒を分裂させた。ヨハネは普遍化に激しく抵抗した。これは救いを個化した。

しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう。(四、一四)

わたしは羊の門である。(一〇、七)

この外に前に掲げた「道」「真理」「道」「よみがえり」などの普遍概念は一人のキリストに特殊化され、所謂 *Ich Sti* なる表現がヨハネにおいて自由に展開している。

パウロはローマ人への手紙(一〇、四八)キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。

終りの前語 *ἔσθι* はまた完成を意味する。

パウロによる律法についての終りとしてのキリストはヨハネにおいてはすべてについての終りであり、またその完成であった。

ヨハネの福音書において新しく約束されるものは助主^{註一九}(*παράκλητος*)の来臨である。

わたしは父にお願いしましょう。そうすれば、父は別に助主を造って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるでしょう。(一四、一六)

神の自己伝達はイエス・キリストにおいてその終局を見た。ではイエス・キリストの自己伝達はどのようにして行われたであろうか。

パウロにおいてはこれが福音の伝達であった。

したがって、信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである。(ローマ人への手紙一〇、一七)

ヨハネにあつては、しかし、これは神の側からの第二の自己伝達となつた。

人がイエス・キリストとの出会いにおいて責任ある応答をなさしめられるのはこの助主によってである。

人は終の日に絡んで審判を連想する。そうしてそのさばきとは人の行為の最終結果に対する神の判決と考える。これは一応正しい。

しかし、このような終の日におけるさばきについて人は一つのことを忘れるのではなからうか。それは最終結果に到る課程についてである。

最終結果への行程——この歩みにこそ正に救いが完うさるべきではなからうか。

この終の日に至る行程における道づれこそヨハネの謂うパラクレートスではなからうか。

わたくしたちは希望によって救われたのだ。(ローマ人への手紙八、二四)

ἡ ἴασις ἐστὶν οὐρανίου

パウロがローマ人への手紙において屢々用いた *ἐλπίς* (希望する)

と云う語はヨハネに至って全く姿を消している。

註二〇 ヨハネは終の日と云う文字を七回使っている。これは何を意味するであらうか。

(*τῆς ἐσχάτης ἡμέρας*)

これはヨハネの「終の日」を肯定することに外ならない。しかし、彼はその解釈をパウロまたその他の使徒に倣わなかった。

私たちはヨハネのエスカトロジーに就いて簡単に最後の一瞥を下す時が来た。

私たちは言いたい。ヨハネにはエスカトロジーは同時にクリストロジクリスト論であり、またクリストロジーは同時にエスカトロジーであると。

註一 ガラテヤ人への手紙二、九

註二 マタイによる福音書二五、一

註三 Nero (37-68) キリスト者の迫害者、タキチスの *Annals*

註四 マラタ・ナ。アラミ語、主よ来ませ

Walter Bauer・Wörterbuch zum Neuen Testament 890. f. f

註五 プルトマン著中川秀恭訳 歴史と終末論

註六 現行邦語聖書は神の知恵と知識の富としているが文法的に疑義がある。

註七 マタイによる福音書七、一五

註八 コリント人への第二の手紙一一、一三、マタイによる福音書二四、二マルコによる福音書一三、二二

註九 マタイによる福音書九、一七

註一〇 コリント人への第二の手紙五、一七

註一一 Straus (1808-1874) 彼によって歴史的イエスの科学的研究に拍車が

加えられた

註一二 Raimarus (1694-1764) ドイツの代表的理神論者

註一三 A. Harnack (1853-1928) ドイツのプロテスタント歴史神学者

註一四 E. Evanson (1731-1805) 高柳伊三郎著イエス伝研究

註一五 William Sanday (1842-1920) The International critical commen-

tary "Romans", 有名

註一六 マタイによる福音書一八、二〇

註一七 フルンナー著、熊沢義宣、大木英夫訳永遠二頁

註一八 コリント人への第一の手紙一一、二〇—二九

註一九 この語がヨハネ文書の外で用いられているのはヘブル人への手紙二三、

六

註二〇 ヨハネによる福音書

六一三九、四〇、四四、五四、七、三七、一一、二四、一二、四八

参考主要文献

Novum Testamentum by Eberhard Nestle 1937.

Das Neue Testament Deutsch neues Göttingen Bibelwerk 1958.

The Literature of the New Testament 1908. E. F. Scott

The critical of the fourthgospel 1908, Sanday

Glauber und Verstehen, Rudolf 13 ultmann

石原謙 基督教史